### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	赤川武助「僕の戦場日記」論 : 手続きとしての「宣撫」
Sub Title	
Author	五島, 慶一(Goto, Keiichi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	2006
year	
Jtitle	三田國文 No.43 (2006. 6) ,p.1- 14
JaLC DOI	10.14991/002.20060600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00296083-20060600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ――手続きとしての「宣撫」―― 赤川武助「僕の戦場日記」論

### 初めに

ではないだろう。 奨励賞(同社主催)に挙げられている、 翌年には同誌に「源吾旅日記」を通年連載、その翌昭和十四年 謂わば講談社に見出され、育てられた作家であると言って過言 講談社から刊行、 され、それがすぐ十月には『僕の戦場日記』と改題・増補して 戦場日記」はやはり『少年倶楽部』昭和十六年二~九月に連載 十月から中支に出征し、帰還後その体験をもとに綴った「私の よ日本の血!」(九月)と、単発ながら連続で発表しているの 誌上に「友情航路」(七月)「輝く日本選手」(八月増刊)「燃え 確なことは未だ知られていないようだ。しかし、昭和十二年の はその中で比較的早いものとして位置づけられるだろう。更に 『少年倶楽部』(大日本雄弁会講談社、以下「講談社」と略記 赤川武助の(作家としての)キャリアの出発点に関して、精 しかも同書はその年度対象の第一回野間文芸 といった具合に、彼は

の戦意高揚施策に最も協力的な出版社の一つであり、特にそのこの時期、即ち戦中期の講談社は所謂大政翼賛――「国民」

五島 慶 一 電伝(喧伝)面では寧ろ積極的に先導役を果たしたことは夙に 宣伝(喧伝)面では寧ろ積極的に先導役を果たしたことは夙に 宣伝(喧伝)面では寧ろ積極的に先導役を果たしたことは夙に 宣伝(喧伝)面では寧ろ積極的に先導役を果たしたことは夙に

### 二 記述の視点

続く読者への意識をも視野に入れつつ分析を進めてゆく。

1

る。 子江をのぼつて行く。私たちは少したいくつしはじめてゐ 十月×日(輸送船にて)/ 私たちの船は、毎日々々揚

(単行本では)最後も「私たち」の進路を示して終わっているのだが、この物語がこのように「私たち」の記述に始まり、れがどのような集団の範囲を指示しているのかが明らかになる行。以下同じ)。やがて程なく「私たち兵隊」と出てきて、そこれがこの作品の冒頭である(引用中の斜線は原文での改

の結果としてあろうが、このことに関して本文は次のように記 る必要はない、あるいはその方が却って都合が好いという発想 知らない。これは作戦遂行上、末端兵士にはその詳細を知らせ タイトルである)自分らがどこに向かっているのかを正確には 「揚子江をさかのぼりつゝ」(これは第一章/掲載第一 点は重要だ。 ・ )・- ここれは第一章/掲載第一回の(③) 輸送船に乗せられた「私」を含む兵たち

る。

述する(傍線引用者、

以下同じ)。

こでもよいのである。私たちはただ命令のまゝに戦場へ行 奥地』といふことだけだ。そして、じつさい かりはしない。私たちにわかつてゐるのは、たゞ『中支の けのことで、 ら、このごろでは、 か は時々思ふことがある。(「揚子江」) 敵と戦ひ、 しそれは、 けつきよくのところは、どこだかやつぱりわ そして勝てばそれでよいのである。 私たち兵隊が勝手にさうざうしてみるだ そのことは誰も口にしなくなつた。 は それはど だか

間が巡察中にうけた敵襲から身を守るために避難待機する 棟田博が少し前に書いていた、 れは、 兵たちは、 がわかる。 はり戦 これより、 無前提に受け容れ、(結果的に)それを体現していること 赤川と同じく野間文芸奨励賞受賞(第二回) (場日誌的な『分隊長の手記』)少し前に書いていた、一般( それ故この状況に「少したいくつしはじめ」る。こ 目の前の状況に対処・順応することがすべてである 「私たち兵隊」は軍組 (非児童) 向けではあるが の中で、「僕」とその仲 の論理を無批 作家である

れてゆくー

士の群れである(集合体としての)「私たち」の中

組み込ま

そのようにして「前線へ」と向かう/送られてゆ

その複数形)としての「私(たち)」が、また当初と同じく兵

中)ではっきりと打ち出されていたように、 での戦争遂行者、具体的には軍部中枢及びそれに近い政治家 いる出来事の意義について考えることは、 って、自分(たち)の行動の意味やより大きなところで動いて くことを行為の第一義 長という職掌が加わる)として、唯眼の前の状況に対応してゆ その真っ最中に「怠屈」を感じているのと同じ構図・ 上級官僚など――にとって好都合であると同時に、 に有害なのである。 そこでの「僕」もやはり末端の一兵士(但しここに、 この論理(原理)は、指導者連中 至上命題としていた。そこ 無益であるのみか時 戦場の一兵士にと 兵士たち自 理由であ ——大局 (同

や先走ってこの部分に関して述べておけば、それは自分に対し げている。 ち」主体の記述の中に、「私」の視点は適宜入りこみ、 引用で言えば「私は時々思ふことがある。」のように、「私た らが(時に無意識ながら)主体的に選びとった態度でもある。 て特別に与えられた任務を果たした(元)宣撫班員 以て言えば、これらがそれぞれ経と緯としてこの物語を織り上 ものとしてのこの物語は事後的に書かれたものである)。 まることはできない(当然のことながら、少くとも発表された なる(「僕の戦場日記」に於ける)「私」は、その地点にのみ留 と同時に、後に巡察係から転じて宣撫班付を命じられることに しかし、 狭義の戦闘要員として自ら前線に赴く一兵士である 次に引くのはこの作品 (単行本で) の末尾だが、 (あるいは 譬喩を

2

へ。前線へ。」(第十二章「姑々焼火」中「一路平安」) へ。前線へ。」(第十二章「姑々焼火」中「一路平安」) で空をあふぐ。明日も天気だらう。私たちは私たちをまつたが、私は私の命のあるかぎり新東亜のために戦はい。だが、私は私の命のあるかぎり新東亜のために戦はい。だが、私は私の命のあるかぎり新東亜のために戦はっ。そして、君たちのことを、命のあるかぎり思ひだすだっ。そして、君たちのことを、命のあるかぎり思ひだすだっ。そして、君たちのことを、命のあるかぎり思ひだすさい。だが、私は私の命のあるかぎり新東亜のために戦はつ。そして、君たちの長という。私たちは私たちをまつて空をあふく。明日も天気だらう。私たちは私たちをまつている。 でいる。 でいる。」(第十二章「姑々焼火」中「一路平安」) へ。前線へ。」(第十二章「姑々焼火」中「一路平安」) でいる。 でいる。 でいる。」(第十二章 「姑々焼火」中「一路平安」) でいる。」(第十二章 「姑々焼火」中「一路平安」)

所以は寧ろ「私」(によるものとして)の記述の中に多く見出所以は寧ろ「私」(によるが、同作がより「少年」向けであるに過ぎないことになるが、同作がより「少年」向けとしてき、この作品はこれより以前に主に一般(大衆?)向けとしてき、この作品はこれより以前に主に一般(大衆?)向けとしてき、この作品はこれより以前に主に一般(大衆?)向けとしてき、この作品はこれより以前に主に一般(大衆?)向けとしてき、この作品はこれより以前に対しては「私」が使われていこでの個人的見聞や個別の任務に関しては「私」が使われていい、部隊としての移動や駐屯等の記述には「私たち」、そ以下、部隊としての移動や駐屯等の記述には「私たち」、そ

具体的に、作中「私」の眼はしばしば大陸の子供たちに向けされるのである。

**冒頂邪である。** られる。次に引くのは第二章(連載第二回)「焦土の子たち」

間ではあるが、その間にふかく感じたことがある。 知らない。が、上陸してからこゝへ来るまで、 人々を見た。/ それらについて、私はまだ多くのことを は漢口に上陸して、はじめて支那の土地をふみ、支那の のへんの地方とを、まもることになつたのである。/ の中を通つてゐる一本の鉄道と、その鉄道を中心とするこ 私たちの戦場へ、やつてきた。日本を出てから、 一箇月にならうとしてゐる。(略)/ 十月×日 支那の子供のことである。(「財布売りの少年」) (湖北平野の中にて)/ 私たちは、 私たちは、 わづかの期 この平野 おほかた やうやく それ

の言わば纏めとして、次のような感慨を洩らす。像が描出されるところとなる。それらを見た「私」は、この章像が描出されるところとなる。それらを見た「私」は、この章囲へ、という視点の移行はこのような形でなされており、以下囲へという視点の移行はこのような形でなされており、以下の言わば纏めとして、次のような感慨を洩らす。

国に生まれてきて、しぜんにきたへあげられた『ねばり強(略)/ これは祖先の代から戦争や天災のつゞく不幸なぐわいにのんきな顔をしてゐるといふことであつた。少女たちを見るたびに、ふしぎに思つたのは、彼らがあんかゞ私が、これらの戦争にいためつけられた不幸な少年

さ』だ。/ </ 新しいことを知るだらう。けれども、今日までに得た 私は今後もたくさんの支那の子供を見、 いろ

づけられる単行本

――の読者に親しげに呼びかける姿勢が採ら

さ』をわすれてゐてはならぬ。/ 愛する日本の少年たち が、どんなことがあつても、この支那少年のふしぎな『強 この考へは、きつと、いつまでもかはらないであらう。 つて美しい東亜をつくつて行かなくてはならない。/(だ 将来、日本の少年は、この支那の少年たちと手をとり合

君たちはしあはせだ。 支那の子供は何も知らずに 『蔣介

ひいては世界新秩序建設のために、 いゝかといふことも知らないだらう。 幸になつたかも知らずにゐたりする。 石はえらい。』と思つてゐたり、 はせなことだ。(略)/ 君たちはあくまで正しくなければ に戦つてゐるかを知つてゐる。そしてまた、 な不自由や苦しみはあるにしても、 ばならぬといふことを、よく知つてゐる。これは、 そんなことはよく知つてゐる。戦争だから、いろくく それと同時に、あくまでも強くそだつて行かなく 何のために自分たちが不 あくまで戦ひぬかなけ 諸君は日本が何のため これからどうしたら だが、 東亜新秩序、 日本の少年 しあ

こに於て急遽それを超えて「日本の少年」へと至り、彼ら、即 ここで二つのことに注意したい。一つには、支那(作中表記 以下同じ)の子供たちを見てきた「私」の視線は、こ 初出誌『少年倶楽部』及びその延長線上に位置

みが少ない分だけ、協同

(——対等)

の仮面が強く働いている

はならぬ。(「シロヂニアカク」)

である。 ・ \_(®)。 女」から、ここではそのうち後者が排除されているということ り、そこでの呼びかけ――期待の対象が「子供」から「少年」 れていること。そしてもう一つは、 へと限定されている、つまりそれまでの記述にあった「少年少 今の記述からも分かる通

協力・将来への準備を共に怠らない「日本の少年たち」---こ が何のために戦つてゐるかを知つてゐ」て、そのための現時 仮想されていることが見えてくるだろう。則ちそれは、「日本 ここには、二方面に亙る差別を前提とした、一つの共同

う集合的な像である。そこからは(「兵士」として) れがすなわち(理想像としての)「少国民」であろう――と かといふことも知らない」「支那の少年たち」は共同体内の た)「少女」は排除されると同時に、「これからどうしたらい 家的事業(現時でのそれは戦争)に加わることがない(とされ 直接に国

び社会慣習・市民意識の両面に亙って)与え続けたことと全く 的)に取り込まれることとなる。この内部での差別化(二層構 人」化しながら、「内地人」とは異なる処遇を(公的制度、 張を続ける大日本帝国が、朝鮮・満州・台湾の人々を一日 の典型的なレトリックによることは言うまでもない。それは についてここには判然とは書かれていないが、これが隠蔽

的低いことと、それ故直接的な利害(例えば公民権など)の絡 同じ範疇にある。ただ、ここでは想定読者対象の年齢層が比較 位に属するものとして、(この論理上は)自動的(つまり強

こそが「宣撫」なのであった。 のだろう。そしてその取り込みのために必要な手続き――手段

語る(正当化する)際の合言葉であったと言ってもよい。後にれたスローガンの一つであり、(戦争による)大陸への進出を尚、ここに出てくる「新秩序建設」は、同時代頻繁に用いら

元(本文の記述つまり日本側の見方に従えば「にせ」)県知事

章「とらはれた県知事」中「周文化」)。 す。どうかよろしくお願ひいたします。」と述べている(第十にぎつて、東亜新秩序建設に進みたいと、心から考へてをりまなど、すつかりさめました。これからは日本のかたべくと手をとなった周 文化が宣撫班に挨拶に来た折も、彼は「抗日の夢として捕えられ、取り調べの上釈放されて以降日本軍の協力者

を中心にその地方の警備にあたるという任で、それについてされる前には一日(夜)だけ巡察係の勤務に就いている。鉄道河から宣撫班員として出征して来たわけではなく、そこに配属言ってもよいだろう。例えば後に詳しく見る通り、「私」は当は当人の叙述であるこの作品の地の文に於ても、この言葉は

「私」は次のように感慨を述べていた。

区域をまもり、こゝに新秩序をうちたてようとする警備隊わけである。この敵を、わづかの人数でうちはらひ、広いだ。これでは、なるほど敵がまだいくらでもはいつてくるくさんの数であらう。けれども、なにしろ支那は広いの大陸へきてゐる日本軍は、ぜんたいからいへばずゐぶんた大陸へきてゐる日本軍は、ぜんたいからいへばずゐぶんた

ることのむづかしさは、こゝにもあつた。の苦心は、内地で考へてゐた以上のものだ。新秩序をつく

ある。(第三章/回「軍曹の戦死」中「匪賊の話」)の任務を思ひ、今さらのやうに心がひきしまつてくるので私は、重い、そしてそれだけにやりがひのあるこれから

という最大限のところへと帰還してゆく、そのような運動とし引いた物語の最後ではまた再び「日支親善、東亜新秩序建設」は場合によっては最も深い対象へと向かっていき、そして先にし場合によっては最も深い対象へと向かっていき、そして先にし場合によっては最も深い対象へと向かっていき、そして先にし場合によっては最も深い対象へと向かっていき、そして先にし場合によっては世界新秩序建設」といった(半ば妄想「東亜新秩序、ひいては世界新秩序建設」といった(半ば妄想「東亜新秩序、ひいては世界新秩序建設」といった(半ば妄想

# 「宣撫」という欲望、その捩れ

て見ることもできよう。

5

んなは毛布にくるまつて眠つてゐる。(「宣撫第一課」) ばかりだ。(略)/ 今、私がこれを書いてゐるそばに、みこの地へ来てはじめてつくられたものである。班員は兵隊で、この日記を書く。/ 私たちの宣撫班は、今度部隊がで、この日記を書く。/ 私たちの宣撫班は、今度部隊がで、この日記を書く。/ 私は今、宣撫班の寝室十一月×日(○○県城にて)/ 私は今、宣撫班の寝室

における前段だとすれば、ここにその冒頭を引いた「腕をうたここまで主に言及してきた三章(回)分がこの作品(物語)

囲は、 わりがない。少し後の記述では、前任者が交代の際に「私」た 上位のものの意を体現し、その股肱として動いている点には変 なる。尤も、ここでも「私(たち)」がより大きな、 に引いた作品末尾の、本隊への「私たち」合流まで続くことと 回想して書く「私」の姿を自ら描き出し、又、「私たち」の n 「日記」本篇であると言えよう。ここでは任務の合間にそれ た少年」(第四章/回) 冒頭での集合的な兵隊の群れから、より実体的な宣撫班 「宣撫第一課」員へと限定されており、その状態は、 以降が、宣撫兵としての「私」の あるい 先 は 範 を

ちに残したという次のような言葉が拾われている。

一撫の目的は、

けつきよく、

皇軍

のあたゝか

気持を

にたいせつな仕事です。根気よくやることです。』(同前)でいつったら、新秩序建設はむづかしいのですから、宣撫はじつでから、しかし、いくら戦闘に勝つても、宣撫がうまくいかせう。しかし、いくら戦闘に勝つても、宣撫がうまくいかせう。しかし、いくら戦闘に勝つても、宣撫がうまくいかけったら、新秩序建設に進むやうにしようといふことにあるのですから、仕事支那の人々に知らせ、仲よく手をにぎり合つて、新秩序建支那の人々に知らせ、仲よく手をにぎり合つて、新秩序建

定させること。」(『日本国語大辞典』初版)ということで、上で、そこの住民に、自国の意思を正しく理解させて、人心を安方針などを知らせて、人々の心を安定させること。②占領地区をもそも「宣撫」とは語義的にも、「①正しい道理や政府の

かく〜簡単なことではない」であろう。のように装わねばならないのであるから、なるほどそれは「なの側から〈自発的に〉行われるように仕向ける――少くともそする恩恵の施しとしてあり、にも関わらずそれが宛も被支配者こでのそれも発想の根柢は自分たち「皇軍」という優位者から意下達のニュアンスを強く含む。傍線部から明らかな如く、こ意下達のニュアンスを強く含む。傍線部から明らかな如く、こ

宣撫班の具体的な実践の第一は、無料診療所を地方都市で経

強いられる。 この「施し」のニュアンスが強く漂っている。「私たちの、 営することにあった。その際使われた「施療」という語にも 行くようになってしまい、その金が尽きたとき再びこちらに 者を専属に擁するのでもなく、現地の言葉すら満足に理解しな 無料という点で勝負を賭けたのである。尤も、軍医等医療従事 をとるといふ」(同章/回 「新たな戦ひ」)ので、それに対し が既にある(「宣撫第一課」)のだが、そこは「かなり高い費 町」には、「福仁病院」というキリスト教会附属の英国系医院 撫第一課」が滞在することになった「○○県城」の「ゐな い戻って来たことを知った「私」は次のように内省する。 (王)少年」が、県政府からの見舞金が出た途端に福仁病院 「私たち」一介の兵隊による「宣撫班施療部」は当初苦戦 初めのうち自分らの患者であった「 腕 をうたれ か 宣

そこには病院としてのりつぱな設備も、人々が安心してかなほしてやるといふ、いゝことをしてきたのだ。そして、してゐるのではない。この医者のゐない田舎の町で病人を

とにかく福仁病院は、

高い金はとるけれ

悪いことを

てゐる。/ 彼らはそのかげで、たしかに支那をくひものて、人々からありがたがられ、尊敬されながら金をまうけはあんなに遠い。しかも彼らは、こんな支那の奥地に来よへる技術もあるにちがひない。/ 英国も米国も、本国

ら、何をぼんやりしてゐたのか。支那のことをよく知つてうなどんなことをしたことがあるか。となり国でありながない。/ 日本人は、これまで支那人にありがたがられるやけをせめる前に、少し考へなければならないことがあたせめる前に、少し考へなければならないことがある。/ 彼らはそのかげで、たしかに支那をくひものてゐる。/ 彼らはそのかげで、たしかに支那をくひもの

られた、大きな任務である。(「新たな戦ひ」)しなくてはならない。これは、今や私たち宣撫班にあたへもつとりつぱなものにし、人々の信用を集めるやうに努力これからだ。私たちとしては、どうしても宣撫班施療部をいやく、、私たちは今さらそんなことをさけぶよりも、

ゐる人が、いつたい何人あつたか。

のである。この点は無前提であるというよりも寧ろ、(悪い)現在の行為――侵略戦争への全面的信頼の上に成り立っている向性がここには示されている。だがそれは、考えるまでもなく過去への反省から未来の建設へ、という、一見尤もらしい方

だ。

過去からの回復・「東亜新秩序」建設という〈明るい〉

未来へ

の投機を担保として、現在に一切の疑問を抱かず、その中で最

最初に見たのと同様の構図に拠るのだろう。又ここからは更

(ら) の本分を見出すという、本論で

大限奮闘することに自分

来の帝国の宿願のようなものだ)が透けて見えもする。代わって得たいという、国家レヴェルでの願望(それは維新以りがたがられ、尊敬されながら金をまうけ」る)を自分たちがに至るまで、大陸で彼らが得てきた二重の利益(「人々からあに、実は英米のようになりたい、より厳密には、過去から現在

が「私たち」を用事で訪ねてくる場面がある。初めに彼の使っこれにすぐ続く記述で、福仁病院の英人医師「ハッチンソン」斜してゆくのも作品全体に通底する特徴として指摘されよう。後段に示される方向性がやや具体性を欠いた理念・精神論に傾後段に示される方向性がやや具体性を欠いた理念・精神論に傾また、引用の前半における比較的正確な現状分析に比して、

なものに」するために考えられているのは、次のようなことと闘志を燃やしているのだが、それに次いで「施療部をりつぱるものか。私たちの新たな戦ひは、これからはじまるのだ。」ド・バイ。」と言って彼が去った後で、「私」たちは「負けてな不幸な人々のために働きませう。」「では、また来ます。グッる。「施療の方は、いかゞです。おたがひに神のしもべとして、

ぱな技術をもち、正義と愛にもえ、ハッチンソンよりも強の医師がほしい。なるべく日本人の医師がよい。/(りつ病院にしなくてはならない。/(将来は、どうしても専門い。薬品も設備ももつととゝのへ、やがてはこれを大きな第一に私たちは大きな熱情と愛をそゝがなくてはならな

7 -

たち」は、結局「三人がかり」の英語で彼に対応することになた「すこぶるなめらかな支那語」を「少しもわからな」い「私

意気とかくごをもつ日本人の医師はゐな 私たちは、大国民である。正面から軍の力をもつて福仁

つとしぜんにその光をうしなつて行くであらう。 ちの病院ができあがつた時には、福仁病院の英国旗は、き 病院をおさへるやうなことはすまい。 しかし、やがて私た (同前)

ハッチンソン側にあって自分らに欠けていたもの .療設備と技術、そして精神面は強く強調されているも —現地 0

を見ていた「私」は次のように考える。

語の理解ということはまるで問題とされていない。先の引用部

に留まっていたかのようだ。(その後「私たち」の語学力向上 とか通じる」(「宣撫第一課」)ことに安んじて、そのレヴェル う実務上必要なものに限られ、「言葉もかんたんなことはなん は「肚子(腹)だの、耳朶(耳)だの薬だのといふ言葉」とい 支那語と、 るかの如くである。これより先に「私たちの、宣撫第一課は、 では「人々の信用を集めるやうに努力しなくてはならない」と 言いながら、それは物資とサービスの提供で事足りると認識 医術の勉強からはじまつた。」とはあるもの、 それ

ら気づかない無邪気な信念のようなものを端的に示している。 的な捩れと、 延いては日本の占領統治政策の本質的問題が見えてくるように する)。このあたりの意識の低さに、「宣撫」という行為自体 について明瞭な記述はないが、その不在を以てこのように推定 「私たち」のこの大陸での行為が欲望していることの本質 く「野菊の墓」(第五章 それに対する正当化 /回)で語られるエピソードも ――というよりも、 それにす ま

をまもるために戦つて死んだ兵隊のお墓なんだぜ。

君たちも少

ら、肝腎の注意にはまるで馬耳東風といった有様である。 笑をしながら、あひかはらずぺこ~~頭ばかりさげてゐ」なが に対して注意するが、そこの「おやぢ」は「へらく~とおせじ 塵芥によって汚れることを知った「私」たちは、その家の主人 を見つけたことであった。その墓が、そばにある民家から出る 発端は、「私たち」が宣撫班在所の近くに「皇軍兵士の墓 それ

しさのあることを、おやぢの顔を見ながら、 をにぎり合ふやうにしようと、一生けんめいになつてゐ 人ゐるだらう。私たちはそれをわかつてもらひ、心から手 だのだ。 戦友も、 ようとして働いてゐることだ、とかたく信じてゐる、この めにかうして働いてゐる。それはまた、 /〜かんたんなことではない。こゝにもまた宣撫のむづか まちがつてゐるのかも知れない。/ 私たちは日本の いや~~、私たちの気持を支那の人たちにしひるのが それが私たちの仕事なのだ。/ 日本のため、そしてまた支那のために働いて死ん しかし、それがわかつてゐてくれる支那人が、幾 だが、これはなか 支那をりつぱに た 第

いることは改めて指摘するまでもない。「私たち」 佐々一等兵」は「おやぢ」に「この町のため、 ここで「日本のため」が無条件に「支那のため」に直結して ぐ⟨感じたのである。(「川ばたの墓」) つまり君たち 私たちはつく の一人「若

ばないのである。 そもそも「私たち」――「皇軍」にあるとは、(当然だが)思 れてもよささうなもんだ」と言っているが(後に「私」も現地 からこそ、村人が逃げ去ったという発想は当初全く念頭に浮か くも顕れている。 村」中「逃げる村人」)と無邪気に考えているあたりに、端無 次いで「村人たちは、日本軍といふものをまだ知らなかつたの して「何事が起つたのだらう?」と「あつけにとられ」たり、 て行ったとき、それを見た村人たちが一斉に逃げ出すのを目撃 い至らないようだ。このことは、 の子供に同様のことを言う)、この町にとっての災厄の原因が しは感謝の気持をもつて、 匪賊だと思つたのにちがひない」(第八章/七回 いつも匪賊に苦しめられてゐるので、私たちのすがたを見 則ち、 他ならぬ自分たち「日本軍」が現れた いはれなくてもさうぢくらゐしてく 後に自分たちがある村に入っ 敵地の

ある。 あることが判明したとき、「私」は次のような感慨を抱くのであることが判明したとき、「私」は次のような感慨を抱くのでる。後にそれが、「私」たちの治療した子供たちによる行為でそれから三四日して又例の墓を見ると、清掃と献花がしてあ開にある。「私」たちは町の小学校に施療に行くようになり、話を戻すと、だが、この作品に固有の問題は寧ろその次の展話を戻すと、だが、この作品に固有の問題は寧ろその次の展

れは美しい心である。あのばくちのすきな、不潔な、シラんのりくつもなかつたかもしれない。しかし、たしかにこはりくつなしにあたゝかいものが流れた。子供たちにもなはりくつなしにあたゝかいものが流れた。子供たちにもな

しなふことはない。 た。けれどもおとなはどうであつても、子供にまで望をうて、がつかりした。次には子供にまでがつかりしようとしたやうに感じた。(略)/ 私たちは支那のおとなにたいしたがひそんでゐた。私は胸に、ぱつと明るい光がさしてきクモだらけの、ぽかんとした支那の子供にも、この美しいクモだらけの、ぽかんとした支那の子供にも、この美しい

た。今日はひじやうに楽しい。(「野菊」)つかはきつとさとつてくれるであらう。/ 私は勇気がで大丈夫である。私たち日本人の持つてゐる深い気持を、い大丈夫である。私たち日本人の持つてゐる深い気持を、い

「遠い日本にゐる私の子供たちのことを思ひだした」りもしてう。又、後の部分では、ある集落の子供たちを見た「私」は、者――「日本の少年たち」への呼びかけを想起してもよいだろ担うべき未来)へとより強く向けられている。ここで、先の読行いながら、「私」の(個人的)期待の眼差しは子供たち(の任務としての「宣撫」行為は大人子供を共にその対象として

## | | 「東亜新秩序の建設」

四

いる(第六章「討伐戦」中「もえる火」)。

記)型兵隊小説同様に、移動(行軍)と駐屯、その際の体験・作品の後半、「討伐戦」の章以降、物語は一般向け手記(日

極的戦闘行為(発砲等)の少ないことと、その代わりに宣撫行見聞を連ねた展開となる。それらの多くと違う点といえば、積

付ける(前出「逃げる村人」)、などといったことに関する記述件の様子が中心に――具体的に例えば、「東亜新秩序の建設、「楊先生的幸福」)や、「『匪賊を追ひはらへ』といふ漫画のビラをまいた」(「もえる火」)り、敵「遊撃隊のビラ」を「ひつラをまいた」(「もえる火」)り、敵「遊撃隊のビラ」を「ひつラをまいた」(「もえる火」)り、敵「遊撃隊のビラ」を「ひつラをまいた」(「もえる火」)り、敵「遊撃隊のビラ」を「ひつラをまいた」(「もえる火」)り、敵「遊撃隊のビラ」を「ひつラをまいた」(「もえる火」)り、敵「遊撃隊のビラ」を「ひつける(場)への後へ私たちのビラ」即ち「道路をつくつて、匪賊へがし、その後へ私たちのビラ」即ち「道路をつくつで、運賊を追びしている模様)に換えて、宣伝工医療行為(勿論それ自体は続いている模様)に換えて、宣伝工医療行為(勿論それ)、などといったことに関する記述作の様子がした。

陸ではある程度現実的(具体的)側面をも持っている。前出物見られるが、掲げられる(第一義的な)目的としては、「こが見られるが、掲げられる(第一義的な)目的としては、「こが見られるが、掲げられる(第一義的な)目的としては、「こが見られるが、掲げられる(第一義的な)目的としては、「こが見られるが、掲げられる(第一義的な)目的としては、「この論抽象度の高い譬喩であるが、「私たち」の「宣撫」は大衆啓蒙りことであって、ここに漸く「私たち」の「宣撫」は大衆啓蒙りな趣きを強く帯びるところとなる。

が多くなる。

わかつた。(略) - 今日一日で、道路といふもののたいせつさが、つくぐく

くのだ。(「敵襲」) う。/ たとへ一粁でも二粁でも、いや百米でも二百米で その第一の杭をうたうとしてゐるのだ。全力をあげてやら たトラツクが、県城へむけて走つてゐるであらう。 あらう。学校もできてゐるであらう。農作物を山づみにし さうざうしてみた。/ 匪賊はもうたえてしまつてゐるで 後、この県内へたてよこに大道路がつくられる日のことを 家店道路のでき上つた時のことを思つてみた。 のくらゐ苦しみをなめてきたことであらう。/ い。どつちにしても、支那の人々は、そのために昔からど の政治が悪いために、道路ができなかつたのかもしれな その時こそ、新東亜建設はでき上るのだ。/ 私たちは、 道路が悪いために、支那の文明はおくれた。いや、 道路ができたらできただけ、新秩序建設戦は進んで行 何年かの 私は、導

面を併せての称である。両者が根柢に於て結びついていること人心掌握(更改)のようなソフト面と、このような主にハード人心掌握(更改)のようなだろう。「新秩序建設」とは、前述のる)ことにあるというのだろう。「新秩序建設」とは、前述の下面で「文明」を構築する(底にある意識としては、してやい面で「文明」を構築する(底にある意識としては、してやい面で「文明」を構築する(底にある意識としては、してやい事は、現行の蔣政権を滅ぼし、そのもとで「苦しみ軍」)の仕事は、現行の蔣政権を滅ぼし、そのもとで「苦しみ軍」)の仕事は、現行の蔣政権を滅ぼし、そのようなといる。

ような「私」の感慨で纏められる。

着工を前に現地に偵察に行くという話だが、その最後は以下の

その章全体として「私」たち数名が道路工事

敵地の村」は、

・・・・・・ かっ♪ ゝ^。 は、主に前者を担う宣撫班の「私」がここに駆り出されている

あの顔を僕はとてもにくめない。(「かばねの上に」) うれしさうにして行列を見てゐる支那人たちの顔を見ろ。 うれしさうにして行列を見てゐる支那人たちの顔を見ろ。 たうの仲よしになるために戦つてゐる。ほら、あんなに んたうの仲よしになるために戦つてゐる。ほら、あんなに の気持はきえた。支那兵はにくい。しかし、良民たちにた だが、戦闘がをはつて帰つてきて、良民の顔を見ると、そ

な最期に心をうたれ、そしてまた堀井の言葉にも大きなかんど、これに対し「私」は全面的に同意し、「柿川たちのさうれつ

Ġ, ず、 面を言うわけである。 つな仕事です。」とあったが、今度はちょうどそのコインの裏 となる。 性が改めて説かれると共に、その先後関係が明かされるところ よる侵略とその後の懐柔という、硬軟二様の手段の相補的必然 をたふした後、これらの建設の実はむすばれるのだ。」と纏め わが武力なくしてできたものではない。 だそうだ。更にそれは「宣撫といひ、建設といつても、 つて戦つてゐる」ことが、「聖戦」という言葉を裏書きする うをおぼえ」る。「日本の軍人は皆このやうなりつぱな心をも いつまでも支那人がわれ~~と手をにぎつてくれなかつた 新秩序建設はむづかしいのですから、宣撫はじつにたいせ (同前)、ここに日本が大陸で行っていること— 先には「いくら戦闘に勝つても、 皇軍の威力をもつて敵 宣撫がうまくい それ 一武力に か

くその過程で要請された言説でもあるだろう。 (1) な犠牲として、祀り上げつつカリキュラムの中に組み込んでゆ向かつて進まなければならぬ。」というように、戦死者を必要ねをいしずゑとし、それをのりこえ/\、さらに大きな建設に秩序建設は進む。(略) 私たちは彼ら戦友たちのたふといかば又、これは「皇軍将兵のたふとい血潮が流されてはじめて新

中で捕えられた支那兵捕虜の話から、私は次のように考える。味方の者が占領したと上官から聞いて」その「警備に行く」途て語られる。ここでは前出「周文化」の話や、「東京は、もうの「私たち」の重責の第一は、やはり宣伝戦にあることが改めしかし続く第十章「とらはれた県知事」では、宣撫班として

のない『焦土抗戦』に追ひこんでゐる蔣介石 らない兵隊たちに、 しへられてゐる。富士山を廬山とまちがへるやうな何も知 らないのだ。 笑ひごとではない。支那兵は、 戦ふたびにまけてゐながら、 勝つたく、とうそばかりをしへ、 ほんたうのことは何も知 勝つたくへとを -私はこ いみ

れらの話をきくたびに、蔣介石はにくいと思つた。(「東京

は勿論 だが、ここにいう「ほんたうのこと」とは何か、「目ざめた」 ちびかなければならないのだ。」「私たちはもつとく〜多くの人 私たち宣撫班の任務はいよ~~重い。私たちはこれらの人々 ふものゝ大きさをつくぐ~感じ」る。そして「私たちは思ふ、 が預言されているかのように見えるが、作品同時代にその意識 ただひたすら「東亜新秩序」という理念だけが高く掲げられる 先に何があるのか、 上「目ざめた人」)と繰り返し強調してこの章が纏められるの を目ざめさせなくてはならぬ。これが、私たちの任務だ。」(以 後の視点からは、ここにはまるで太平洋戦争後期の日本の姿 ほんたうのことを知らせ、人々を東亜新秩序建設の道へみ 「ないであろう。作中「私」 はここに 具体的・明瞭なことは一切語られぬまま、 「『宣伝の力』とい

僚日本兵の勇敢な ることと併せ、以上から見えてくるあり方を纏めると、「皇軍 (会話という設定上の必然でもあるが) この章の前半 (「周文化」) で、 (立場を替えて言えば残虐な) 「五桂市の討伐」 かなり克明に描出され 戦い における同 いぶりが、

形 切り連載

態の延長上に

要のないもの、 この作品は持っている。更に言えば、その空白性は今更語る必 者はその代表とされる。注6など参照)であれば当然既に理解 は殆ど空白のままにそれが繰り返し強調されるという構成を、 よって「うそばかりをしへ」られた人々を、自分たちの側 に対してみせる優しさを前提に、 兵士」の勇猛な戦いぶりと地元一般人民 「正しい」道へ教え導くという図式、 模範的な「少国民」(初出誌『少年俱楽部』読 「私たち」宣撫班 しかもその終着点の内実 (文中では が 「良民 蔣政権

にまで引き上げてやらねばならない、という発想である。で、一般人民とは宥和をはかり、自分たちの「高い」レヴェル ためには目前の敵 新秩序」というものは疑いなくよいものであって、その実現 てのものだろう。「皇国」日本は正しい。それが掲げる「東 ――蔣政権とそちら側の軍隊を打ち破る一方 0

しているものという、これまた自明の(とされる)前提に立

えられたものであった。そこには「私」の宣撫班での仲間であ 分を含む最後三章は初出時にはなく、 い、という見方もあるいはできよう。 日近し」と「姑々焼火」の二章はエピローグ以上のものでは 「宣伝」である)を前面に出してしまった後では、 このように、 読者への理念(それこそメタ=レヴェルで 実際、 後の単行本化に際して 既述の通りこの部 残る「さる 加 0)

り地元の少女との心的つながりがそれぞれ描 ってやって来る少年の様子、及び「私」が治療してやったやは った小山上等兵と地元の少年の交流、 独立性の高い各エピソードの連環 (書き加えられた)これらを読んだ場合、 特に小山戦死後も彼を慕 か れており、 ーという初出

ターンの焼き直しに過ぎないとも言える。 厳しい見方をすればそれらは今までに何度も使用されてきたパ

だすだらう。」(前掲)という決意も新たに、本隊へと合流する 少し広く「○○県城の人々」)のことを、命のあるかぎり思ひ 東亜のために戦はう。そして、君たち(引用注/ここではもう ういふ成績をあげたかはしらない。」と言いつつも、少くとも うな記述への志向の表れを認めることができるだろう。そうし の記録(これ即ち「日記」である)を、より厳密には、 実に歩を進めていく「私」たちの「戦場」での行為とその成果 合、そこにはちょうど螺旋のように循環しながら少しずつ進ん い。そこで、この部分を含めて改めて全体を見渡して見た場 が意識されるであろうし、亦読み手もそれを意識せざるを得な のダイナミズムについては前に述べた通りである。 ために「前線へ」旅立つという場面に繋ぐためにある。 自己採点では一定の成果を認め、「私は私の命のあるかぎり新 た中、末尾二章は最後に「私たちの長い間の宣撫の仕事は、ど で行く物語構造の中に、試行錯誤を繰り返しながら、しかし だが、単行本として一括された本文では、全体的構成までも そのよ

尚、『海軍』に関しては、山本明「一五年戦争末期の雑誌(二)七月)、「鉄脚の若鷲」(『若桜』昭和十九年五月)など。死所ブナにあり(陸戦の神安田部隊長)」(『海軍』昭和十九年六・

- いては、『三田國文』第四十四号(平成十八年十二月刊行予定)に五十九年五月)が詳しく、総目次も掲げられている。『若桜』につ――大日本雄弁会講談社刊『海軍』――」(『評論・社会科学』昭和尚、『海軍』に関しては、山本明「一五年戦争末期の雑誌(二)
- | 引声は、全意(うらっぱ恵伐を引)でしてい、 へんきつしてに参照。| 本行本各章と初出連載の関聯については、稿末の対応表れを付す。単行本各章と初出連載の関聯については、稿末の対応表

初刊単行本には章番号は振られていないが、本論では便宜的にそ

3

改題と内容細目を発表の予定。

- 題のみを挙げる。 (4) 同作は、各章(あるいは連載各回)ごとにタイトルを持つ上、その章題・節題の順で、あるいはこのように節箇所を示すために、この章題・節題の順で、あるいはこのように節用れを更に細分して小見出し、節題のみを挙げる。
- (6) これに関しては、初出誌の読者が基本的に男児に限定される(同(6) これに関しては、初出誌の読者が基本的に男児に限定される(同年の分析のように見えなくもないが、それは「君たち」――「日本の少時期講談社は他に『少女倶楽部』幼年倶楽部』を出しており、そ時期講談社は他に『少女倶楽部』が手倶楽部』を出しており、そ

れていた(この点に関しては、近代文学合同研究会(第六回シンポや創作、更には広告に至るまで)にそうした言説・発想が過剰に溢いが、これは初出テクストがそうした発想を持たないという意味でいが、これは初出テクストがそうした発想を持たないという意味でいが、これは初出テクストがそうした発想を持たないという意味でい、これは初出ではこの部分に傍線部の(それに相当する)記述がなり、初出形ではこの部分に傍線部の(それに相当する)記述がなり、初出形ではこの部分に傍線部の(それに相当する)記述がなり、

### Ä

- 視化される〈作家権〉』 同会 二○○四・十)を参照。 賞とその周辺 ──」(近代文学合同研究会論集第1号『新人賞・可は、五島「講談社的〈作家権〉ビジネスの一様相 ── 野間文芸奨励は、五島「講談社的〈作家権〉ビジネスの一様相 ── 野間文芸奨励
- 「荒鷲百人を育てた熱血訓導を訪ふ」(同誌 同年十二月)、「我が(2)「戦場精神と必勝の国民生活を語る」(『キング』昭和十八年二月)

### 附 『僕の戦場日記』単行本と初出「私の戦場日記」各章対応表

単行本
初出

第 章 焦土の子たち」 |揚子江をさかのぼりつゝ| 第二回 第一回(『少年俱楽部』昭和十六年 二月)「揚子江を遡りつゝ」 (同三月)

第四章 第三章 第二章 「腕をうたれた少年」 「軍曹の戦死」 第四回 第三回 (同五月) 「腕を射たれ (同四月)

討伐戦 野菊の墓 なし 第五回 (同六月

少年」

第六章 第五章 (8) この点に対する「私」の認識は、後に「(班内の) 誰が治療して

の治療をすること。」(『日本国語大辞典』初版 用例略

「【施療】 ①貧しい病人などを無料で治療すること。②病気など

として敢えて触れられなかったものと考える。

楽部』と読者たち」も参照されたい)ために、言わずもがなのこと

近代文学合同研究会論集第3号『〈講談社〉ネットワークと読者 楽部』と読者たち」にて検証を行った。その内容の一部を纏めた、 慶應義塾大学〕にて行った口頭発表「戦時『新体制』下の『少年倶 ジウム「〈講談社〉ネットワークと読者」〔平成十七年十月一日

(仮)』(同会 二〇〇六・十予定) 所収「対米開戦前夜の『少年俱

もかくべつちがつてはゐない」(第十二章「姑々焼火」中「布穀と

少女」)と述べているあたりから窺える。

第九章 第八章 第七章 敵地の村 慰問袋と兵隊」 第六回 第七回 (同八月 (同七月

第十章 第十一章「さる日近し」 「とらはれた県知事」 「戦友のかばねを越えて」 なし なし 第八回 (同九月) えて」 「戦友の屍を越

引用に際し字体を通行のものに改め、 ルビは適宜省略した。

女倶楽部』と合同企画)、昭和十六年五月号で入選作を発表してい 後援で「靖国神社の英霊にさゝげる文」を募集(『幼年俱楽部』『少 連載同時期の『少年倶楽部』では、陸軍省・海軍省・軍事保護院 式であったことを指摘している(『日本の戦争児童文学』(久山社

一九九五・六)

三〇頁)。

時代の、(限定すれば)児童向け読み物においても、

定型の言説図

第十二章 「姑々焼火」

なし

長谷川潮は同じ部分を引き、又他作品の名を挙げつつ、これが同

遊」ぶというものである。

た。その内容は正しく「日本兵と支那の子供(王兄弟)が仲よく 月)では漫画「ほがらか王君」が連載(各回読み切り)されてい連載と同時期の『少年俱楽部』(昭和十六年一月~同十七年十二